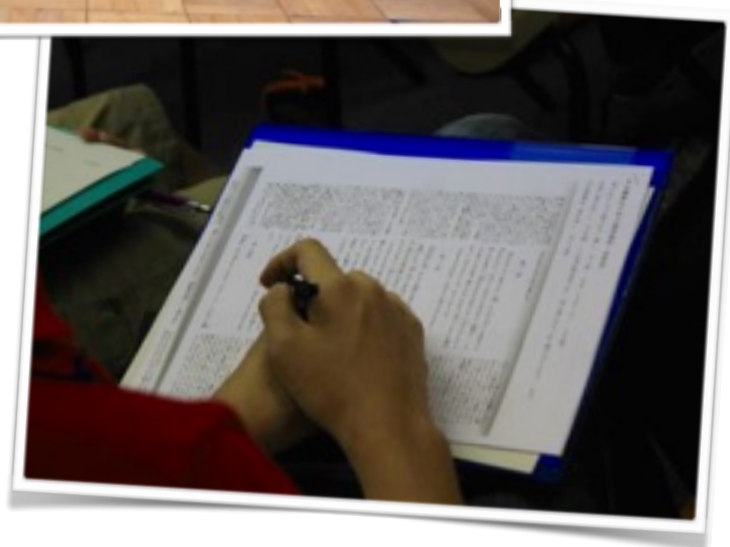


Bridge School 2015 in 信州

実施報告書



「Bridge School」は、地方の高校生に「自主的な学び」を提供するために発足した、大学生による任意団体です。2012年夏以降、鳥取と信州で合宿プログラムを実施してきました。今回で累計5回目となる「Bridge School 2015 in 信州」の報告書です。



実施要項

- 代表者：関口 真司（慶應義塾大学法学部4年、長野県飯田高等学校出身）
- 認定NPO法人 長野県みらい基金 事業指定プログラム 登録団体
- 独立行政法人 国立青少年教育振興機構 子どもゆめ基金 助成活動
- 後援：長野県教育委員会
- 日時：2015年3月11日～3月13日（2泊3日）
- 会場：国立信州高遠青少年自然の家（長野県伊那市 高遠町藤沢 6877-11）

参加者情報

所属高校・学年別参加人数（合計19名、五十音順）

	1年	2年	3年	合計
長野県飯田高等学校	1	3	0	4
長野県飯田風越高等学校	0	1	0	1
長野県飯山北高等学校	0	3	0	3
長野県伊那北高等学校	1	0	0	1
小林聖心女子学院高等学校	0	0	1	1
長野県下伊那農業高等学校	0	5	0	5
長野清泉女学院高等学校	0	0	1	1
長野県長野西高等学校	0	3	0	3

男性 8名、女性 11名（※長野県内参加者 18名、大阪府からの参加者 1名）

コンセプト：「橋を渡る人」のために、橋を架けたい。

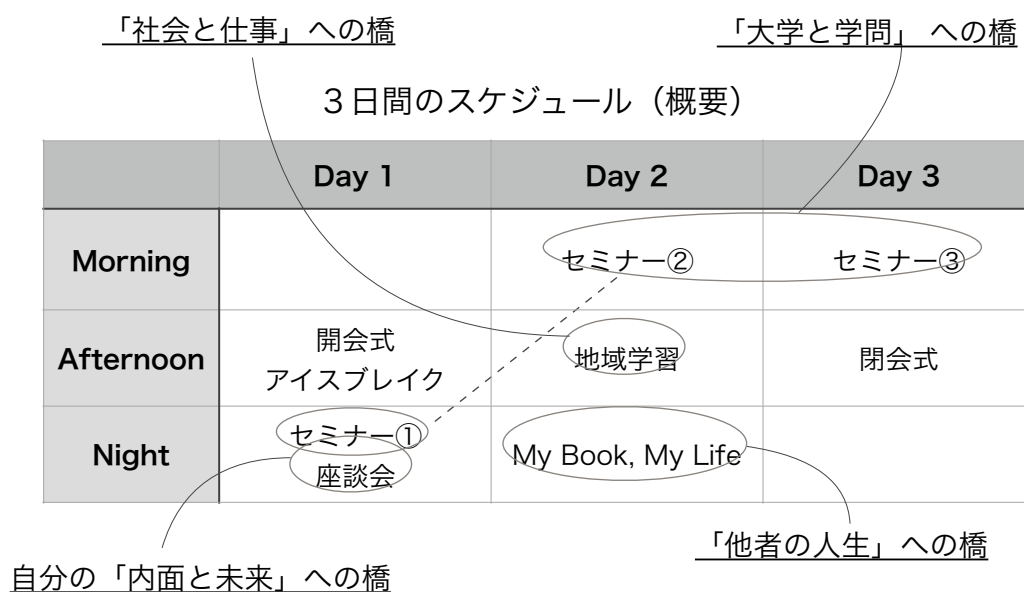
現代社会には多くの「隔たり」が隠れています。たとえば、高校と大学。学問と現実社会。学ぶことと働くこと。都市と田舎。未来と過去。人と人。 etc...

誰もが、この断絶を乗り越えたいと思っています。しかし、そのための「橋」がありません。私たちは「Bridge School」という名の橋を、自らの手でつくりたいと思いました。

私たちが架ける橋を渡った後輩たちが、いつの日か、私たちには想像もつかないような橋を架けてくれることを期待しています。

コンテンツの意図：橋を渡り、「自主的に学ぶ力」を得る。

3日間のコンテンツを通して、いくつもの「橋」が架けられていきます。それらの橋は「自主的な学びの場」であり、参加者は自己の未来を選び、創り出す力を得ることができます。



目標達成度の確認（閉会式アンケートより）

Q. Bridge Schoolに参加して、自身の興味や進路の考えは変わりましたか？

A. Yes: 16人 No: 3人 （※詳細は11-12頁を参照）

閉会式アンケートによる評価

総合的な評価（合計回答数：19）

	5 満足・余裕	4	3	2	1 不満・過密
総合満足度	16	3	0	0	0
スタッフ対応満足度	18	1	0	0	0
スケジュールの過密さ	1	5	5	8	0

分析：

コンテンツ内容とスタッフ対応はおおむね高評価を獲得できたが、全体的にスケジュールが過密であり、高校生に負担をかけてしまった。コンテンツを絞り込み、スケジュールに余裕を持たせる必要がある。

コンテンツ別の評価（合計回答数：19）※セミナーのみ19×2講座=38

		5 満足・難しい	4	3	2	1 不満・簡単	未回答
座談会	満足度	12	7	0	0	0	なし
地域学習	満足度	11	5	1	1	0	1
セミナー	満足度	37	1	0	0	0	1
	難易度	6	9	19	4	0	なし

分析：

セミナーの満足度は極めて高く、難易度設定も適切であったようである。しかしながら、いずれのコンテンツにおいても時間不足感が残り、高校生・大学生・社会人ゲストともに不完全燃焼となってしまった。

余裕を持ってスケジュールを組めば、それぞれのコンテンツにじっくりと取り組めるようになるので、満足度も更に向上していくと考えられる。

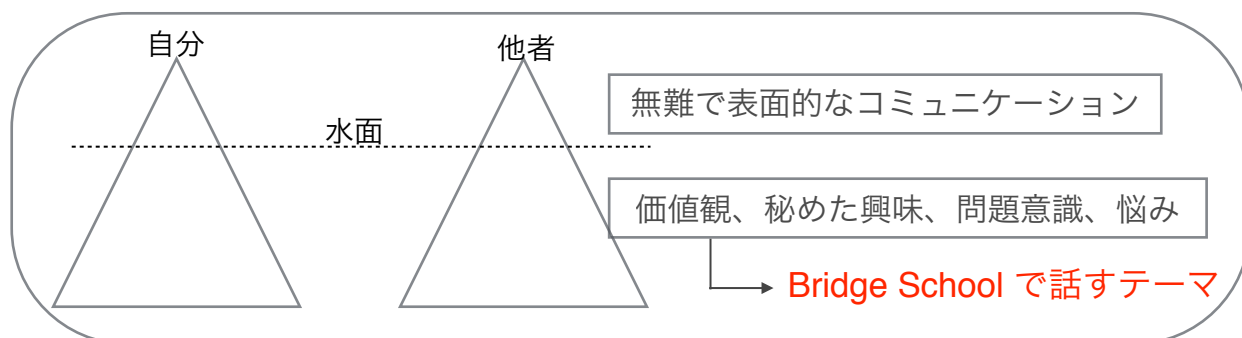
自主的な学びの前提としての「安心感」：

「浮く」ことを恐れず、マジメに話せる。否定されず、押し付けられない。あたたかで真摯な対話の場所。

普段の学校生活や家庭生活の場でマジメな話をしようとしても、案外できないものです。

- ◆ 「自分にとって本質的な価値観は何か？」
- ◆ 「言葉にしづらい不安や悩みをじっくり語ってみたい」
- ◆ 「なぜ大学に行くのか？」 「そもそも学問に社会的意義はあるのか？」
- ◆ 「夢を語り、仲間を得たい」 「社会・政治問題について、本音で議論したい」

現代のコミュニティには、こうした問いを受け止めるだけの懐の深さがあるでしょうか？



日常生活では「浮く」ことが怖くて、なかなかマジメで深い話をする事ができません。心の中で思っていることを押し隠したコミュニケーションは、あたたかも「氷山の一角」だけを見せ合っているようなものです（上図参照）。これでは自己理解も他者理解も思考力も深まりません。「やりたいこと」も見つかりません。

一方で、Bridge School は「真剣に考え、じっくりと言葉を紡ぐ場所」です。また、その自己表現を「決して否定されない場所」でもあります。

あたたかく真摯な対話は、それぞれの「自己肯定感」を育み、やがて「自分のやりたいことを追求すること」を恐れなくなります。

この雰囲気があるから、誰もが安心して「橋」を渡っていけるのです。

Bridge School 日誌

開始前・・・



緊張した面持ちで集合場所に集まる高校生（左）と、打合せを行う大学生スタッフ（右）

3/11（1日目）勇気を出して「言葉にする」：自己の内面へのブリッジ

開会式（13:00-）

代表の関口がBridge Schoolの理念について説明し、冒頭のあいさつとしました。続いて3日間の流れの説明や施設利用に関する諸注意を経て、アイスブレイクに移ります。

アイスブレイク（13:30-）



ほとんどの人が初対面なので、アイスブレイクは欠かせません。まずは、ジェスチャーのみで誕生日順に並ぶ「バースデーチェーン」に挑戦しました。そして、輪になったまま一言ずつ自己紹介を行います。続いて、いくつかのチームに分かれて「雪山遭難ゲーム」を行いました。これは雪山でのサバイバル状況を想定した戦略ゲームの一種であり、チームでのディスカッションを通じて、「臆せず自分の意見を言うこと」の大切さが伝わる仕組みになっています。

目標設定タイム（14:50-）

スタッフが用意した「目標設定ワークシート」を使って、Bridge Schoolでの目標を設定します。基本的には選択式ですが（例：「積極的になること」「視野を広げること」）、それを選んだ理由についても考えることで、自己理解の深化を目指します。（なお、こうした作業では、大学生スタッフがファシリテーターとしての役割を果たしています）

セミナー 1/3（15:50-）→8-10頁を参照

座談会：「夢について」（19:00-）

夜の座談会では、高校生と大学生が「将来やりたいこと」「夢」などについて語り合いました。自分の内面を他者に語るのは勇気がいることですが、ほとんどの高校生が「時間が足りない」とアンケートに回答するほど、積極的に自分について語る時間となりました。ファシリテーター役、相談役のはずの大学生スタッフも、大いに刺激を受けた時間です。

3/12（2日目）「社会と他者」へのブリッジ

セミナー 2/3（9:00-）

地域学習：働く視点/企画会議（13:00-）

地元・長野県で働く社会人の方を講師としてお招きして、働くことについて考えるワークショップです。2部構成となっており、前半は社会人講師の方と一緒に「働くのに必要なモノってなんだろう？」というテーマで意見交換を行いました（ワールドカフェ方式）。これによって、遠くにあった「働く」という言葉が、身近な「モノ・コト」と関連していることに気づきます。後半は、各講師の方に持ち寄っていただいた仕事上の課題を解決するための「企画会議」を行います（例：「地域貢献で自己実現しながら食べていくには？」



「若者がUターンするために、小学校時代に経験しておくべきことは何か？」）。最後に、各チームで出したアイデアを他チームにプレゼンします。答えのない問題に取り組むことで、仕事の困難さと、その反面にある自由さを感じ取ることができました。

ご協力いただいた社会人ゲストの皆様

久保田 淳子 様	シニア野菜ソムリエ
児玉 光史 様	地元カンパニー 代表取締役
長谷川 祐介 様	飯田市職員
山田 崇 様	塩尻市職員
湯澤 英俊 様	飯田市職員

※五十音順



My Book, My Life (19:00-)



20名の参加大学生が、それぞれの思いや人生の転機について、高校生に熱く語る時間です。ただし、「本」に絡めて語る」というのがルールです。個性溢れる選書やエピソードからは、Bridge Schoolが無ければ決して出会わなかった人々の「かけがえのない多様性」が感じられました。「他者」の人生観やものの見方を垣間見て、人生が豊かになる瞬間です。

3/13 (3日目) いくつもの「橋」を渡り終え、日常へと還っていく。

セミナー 3/3 (9:00-)

閉会式 (13:00-)

Bridge Schoolの閉会式は、高校生も大学生も関係なく、輪になって感想を述べていくスタイルをとっています。そこで語る内容には何の指示も制約もなく、完全なアドリブです。しかしながら誰もが、3日間での自身の変化について、饒舌に語ります。

「迷いながらも、前に...！」

もはや高校生も大学生も関係なく、希望と自信を持って日常へと還っていきます。



セミナー紹介

年齢の近い大学生だから提供できる「自主的な学び」の空間

大学（院）生講師による少人数セミナーは、Bridge Schoolのメイン・コンテンツです。今回は6つの講座が開講されました。（いずれも3コマ構成、高校生は2講座選択）

どの講座も、高校生3～4名と大学生スタッフ1名が1クラスとなっています。少人数制なので、講師大学生と受講者の距離が非常に近くなり、双方向的で活発な議論が交わされます。

また、日常経験や高校での学習内容に結びつくように設計されているので、それぞれの学問を学びながら、同時に「学問をする意味」についても考えていくことになります。



1. 農学（植物学）セミナー

講師	野村康之（京都大学 大学院 農学研究科 修士1年）
全体目標	(1) 「大学」「研究」についての具体的なイメージを持ってもらう (2) 多くの植物の生存戦略を統合的に解釈していくことで、学問の思考プロセスを体感する
1時間目	(1) 大学と研究（基礎・応用）についての概要説明 (2) 「植物（＝その場から動けない）が手紙を送るとしたら…」という問いをベースに、植物の生育に必要な3つの要素を理解していく
2時間目	「資源競争」「環境ストレス」「攪乱」という3つの観点から、多様な植物の生存戦略を分析し、自分自身で説明できるようになる
3時間目	「”最強の植物”は存在するか？」という講師からの問いに対して、これまで得た知識や考え方を駆使して、論理的な回答を構築していく

植物が必死に生きてる姿、生きようとする意志、そのきらきらを感じました。「限られた資源をどう使うか」《人間にとって限られた資源⇒時間、お金？とか》をはじめ人間とも通じる部分があるなとずっと思いながら今日のセミナーを受けてきました。だからこそ、「人間は戦略を変えられる」という言葉が胸にきました。（農学セミナー感想）

2. 数学セミナー

講師	佐伯憲太郎（慶應義塾大学 大学院 理工学研究科 修士1年）
全体目標	(1) 高校までの”科目としての数学”と、大学以降の”学問としての数学”をつなぐ (2) 高校生が自分自身で課題探求・解決を行い、きちんと意見を言えるようにする
1時間目	(1) 「数学における感性」の意義を議論し、数学のイメージを覆す (2) 3時間目にプレゼンする探求テーマを決定する（自分が苦手な数学分野の中から）
2時間目	(1) 事前課題で持参してもらったテーマを議論していく中で、「証明」の構造を理解する (2) プレゼンの準備（例：高校教科書を改めて深く読んでみる）を行う
3時間目	(1) プレゼン：自分なりの根拠を持って意見を発表する体験 (2) 数学の本質的部分や実用例の紹介によって、数学を学ぶ意義を考える

3. 教育学セミナー

講師	遠山裕一郎（東京大学 大学院 教育学研究科 修士1年） 補助：町田美穂（東京学芸大学 教育学部 3年）
全体目標	(1) 教員免許取得など制度的な内容を知る (2) 模擬授業を行うことで「教育を行う側」の視点から、教育の意義や在り方を考える
1時間目	(1) 教員養成系教育学部や教員免許状取得のためのカリキュラムの説明 (2) 「教育の目的とは何か？」についてのディスカッション
2時間目	実際の「国語」の授業例を見て、教師の意図がどこにあるかについての意見交換・討論を行う。これによって「教える側」の立場から教育を考える視点を得られる。
3時間目	1人10分ずつの「模擬授業」を作成・発表し、教師の視点から教育の難しさを捉える。



4. 経済学セミナー

講師	福田純平（神戸大学 経営学部 3年）
全体目標	経済学・経営学的なテーマに取り組むことで、「社会科学を学ぶ意味」「そもそも”理論”とは何か」といった重要な問題について考えていく。
1時間目	(1) 身近な企業の戦略の背後にある論理を読み解くことで、社会科学の力を知る (2) 一方で、疑似相関や反証可能性の議論を紹介し、「理論」の限界も知る
2時間目	ゲーム理論：「囚人のジレンマ」の考え方を駆使して、一見不可解な社会現象を、自分自身の頭脳で解釈していく楽しさを実感する。
3時間目	(1) 交渉ゲーム：日常の行為（交渉）においても、理論は有用だと実感する (2) 「社会科学は人生に役立つか？」「経済学と経営学のおもしろさ」について議論

5. 地域セミナー

講師	越智祐介（香川大学 経済学部 4年）
全体目標	(1) 自分の地元に関心を持ち、地域を好きになる (2) なりたい自分、やりたいことを表現できるようになり、10年後の自分をイメージする
1時間目	(1) 「住んでいるところ自慢」（事前課題）を発表し、身の回りの環境を見直していく (2) 「地域活性とは何か？」についてのレクチャー、ディスカッション
2時間目	(1) 全国の「地域」が抱える深刻な問題についての説明 (2) 長野のいいところを出し合い、「住みたい街」のイメージを組み立てていく
3時間目	(1) 各自が「住みたい街」をA4紙にまとめ、発表する（人前で堂々と”伝える”経験） (2) まとめ：発表を踏まえて、再度「地域活性とは…」のディベート

6. 物理学セミナー

講師	若村浩明（慶應義塾大学 理工学部 4年）
全体目標	学問（特に物理）のおもしろさを伝える。とりわけ「直接測れないものをどうやって測るのか？」というテーマを中心に据え、考察の中から、科学的視点の獲得を目指す
1時間目	(1) ノーベル賞などを題材に、現代の物理をおおまかに紹介 (2) 「地動説と天動説、どちらが正しい？」：当たり前だと思っていたことについて議論
2時間目	いくつかの実験を通じて、学校の勉強で得た「知識」を、身近な現象の理解・解釈につなげていく（また、その記述方法としての数学についても言及）
3時間目	物理学・数学の知識を駆使することで、直接的には測れないことも分かると体感する（例：古代からの宇宙観の変遷について解説）

Q. Bridge School は、あなたを変えましたか？

Yes 16人

<p>農業、地元、人間関係...他にも沢山のこ とについて考えさせられた。特に、自分の 好きなことに打ち込んでいる人ばかりで、 自分も好きなものに一直線で行きたいと思 った。</p>	<p>今まで「目立ちたい欲」や「ほめられた い欲」があり、それがネックで選択肢が減 っていたということがあったので、B to B で業績を上げている企業などもしっかりと 調べていきたいと思いました。</p>
<p>具体的な進路はまったく決まっていな いのですが、様々な分野があることを知れ て、幅がすごく広がった気がします。考え 方なんかも変わりました。</p>	<p>CM製作の足がかりを父から得たのでCM, CMと考えていましたが、番組やコピーライ ターなど別方面からのアプローチも視野に 入れようと思いました。</p>
<p>変わったというか、新しい方向や興味を もつ分野が加わった。</p>	<p>根本から見直そうと思った。より綿密に していきたい。</p>
<p>新しいやりたいことを発見できた。</p>	<p>次にやることが見えはじめた。</p>
<p>笑顔でいよう、とか、がんばり続けよ う、という気持ちをずっと持っていたこと で、さらに強くすることができたし、その 大切さというものが分かった。キラキラ輝 いている人は影で努力しているし、自分の 時間をしっかり持っていてすごいと思っ た。わたしもそうになりたい。</p>	<p>なんのために大学進学するのか、とか決 めてかなきゃいけないのかと思ってたけ ど、何をしたいのかとかは大学に行って決 まることもあり、まだあせらなくてもいい ということや、悩むことは自分の財産にな るというポジティブな考え方に変わりました。</p>
<p>去年はBridge Schoolに参加したことで新 しい世界が広がったけど、今年のBridge Schoolではその新しい世界で自分の進む道 を選ぶ力がついたと思う。</p>	<p>将来について、今まで失敗はいけない事 で、失敗すると周りの風当たりが強くなっ て苦しいのかと思っていたのですが、失敗 することによって成長できると聞いて、こ れからは多くの事に挑戦していきたいと思 いました。</p>
<p>自分のやりたい事はなんなんだろうと思 いました。もっとしっかり考えてみようと思 います。自分にしっかり向き合っていこ うと思います。</p>	<p>経済学は最初難しそうで、あまり興味が 持てなかったが、今回の講義を通して興味 が湧いてきた。また、数学に対してイメ ジが変わった。</p>
<p>ずっと欲しいなって 多分思ってた言葉を もらえて嬉しかったです。</p>	<p>考えがまだまだ甘いことがよくわかりま した。自分のたりないものやそのヒントも 見つかったので改善したいです。</p>

No 3人

将来やりたいことは変わらなかったが、大学の話を聞いているうちに、これからのことについての不安は減った。	変わりませんでした。いつも理系の人だけに囲まれているので、いろいろな方面の話が聞けてよかった。
地域活性という大きな軸はブレないけど、それを様々な視点から見る事が出来るようになった気がします。	

※閉会式アンケートより採録。省略はなし。

運営スタッフ紹介

大学生スタッフ 一覧（当日参加）

代表 実行委員長	関口真司（慶大・法・4年）	講師・会計 実務統括	遠山裕一郎（東大院・教育学研究科・修士1年）
企画統括	楮原航平（慶大院・法学研究科・修士1年）	タイムキーパー	小寺慶（阪大・法・3年）
企画・広報	速渡開也（信州大・教育・4年）	企画・広報	那須絢太郎（信州大・教育・4年）
企画	松澤和徳（明大・法・3年）	企画	林七海子（明大・法・3年）
企画	北山智之（金沢大・地域創造・3年）	企画・危機対応	北野航輝（信州大・人文・1年）
広報	橋枝紗知子（東京学芸大・教育・4年）	広報・講師補助	町田美穂（東京学芸大・教育・3年）
記録	和田耕介（関西大・環境都市工・3年）	施設対応	孝森博樹（信州大・農・3年）
危機対応	有馬衿花（信州大・教育・1年）	講師	越智祐介（香川大・経・4年）
講師	野村康之（京大院・農学研究科・修士1年）	講師	佐伯憲太郎（慶大院・理工学研究科・修士1年）
講師	福田純平（神戸大・経営・3年）	講師	若村浩明（慶大・理工・4年）

謝辞

- 期間中は、キャリア教育アドバイザーの武口翔吾氏に同行していただき、全般的なアドバイスを受けました。
- 企画段階において、読書サークル「aura book community」主宰の日渡健介氏に多大なご協力をいただきました。



「Bridge School 2015 in 信州 報告書」

(2015. 3. 29 発行)

発行者：Bridge School 2015 in 信州 実行委員会

代表者：関口 真司（慶應義塾大学 4年）